

『源氏小鏡下』の紹介と翻刻②

安永 美保

〔要旨〕 本稿は『同志社女子大学大学院文学研究科紀要第十一号』（二〇一二年三月）に掲載された『源氏小鏡下』の紹介と翻刻①の続編である。前稿では『源氏物語』の梗概書である小槌氏蔵『源氏小鏡下』について、書誌情報の紹介と少女巻から若菜下巻までの翻刻を行った。当初、該資料は二巻本として

伝わっていたが、上巻は『源氏物語』とは関係のない資料に後世に同表紙をつけたものであることがわかった。したがって、該資料は前半部が散逸しており、その章だてや書写年代等の情報は不明である。また、現存する少女巻以降の本文と類似した本文をもつものは、確認できた公刊されている梗概書の中にはなかった。

一方で、該資料の梗概本文は『源氏物語』と異なる部分が散見され、引かれている和歌も特異なものである。表記上も濁点等がないことから、江戸後期の版本の写本とは考えにくく、現

行の『源氏小鏡』と同様の中世頃に成立した可能性が高い。残欠本のため断定は避けるが、本書は中世近世を通じ数多く存したといわれる未確認の『源氏物語』の梗概書に列なるものの一つと考えられる。

そこで、本稿では残りの柏木巻から夢浮橋巻までの翻刻を中心に、現時点での該資料の梗概書としての性格を紹介する。

〔キーワード〕 源氏小鏡^{げんじこかがみ}・源氏鏡^{げんじかがみ}・源氏物語梗概書^{げんじものがたりうかがいしょ}

普通名詞としての「小鏡」

前稿^{注1}では小槌氏蔵『源氏小鏡下』について、該資料の題簽に本文同筆で「源氏小鏡下」とあることから、中世以降数多

く作成された『源氏物語』の梗概書の中で、最も多く流布した『源氏小鏡』の一つと紹介した。しかし調査を進めた結果、該資料の梗概本文や引用されている和歌など、どの項目と比較しても現行の『源氏小鏡』（以下『小鏡』とする。）と類似する点は見られなかった。

さらに、『小鏡』の特徴である「連歌寄合の詞」も該資料には記載されていない。現行の『小鏡』のなかにも「連歌寄合の詞」のないものはあり、伊井春樹氏^{注5)}の分類によると、梗概中心の第五系統本がそれにあたる。この第五系統本は伊井氏の指摘によると六本確認されており、そのうちの四本^{注6)}はすでに翻刻が公刊されている。

この四本と該資料を比較した結果、梗概本文や引用和歌等に特筆するような類似点は見られなかったものの、京都大学付属図書館本と連蔵筆天理図書館本との間で、紫式部の石山寺起筆伝承が記載されている点が一致した。現行の『小鏡』の中で、起筆伝承を有するのは第五系統の先にあげた二本のみである。

「連歌寄合の詞」を持たない第五系統の『小鏡』と該資料に起筆伝承という共通点があることは無視できない事実である。しかし、京都大学付属図書館本・連蔵筆天理図書館本・該資料に

みられる起筆伝承はその書かれている本文も置かれている場所も異なる^{注4)}ことから、該資料が第五系統本と同様の流れをくむ本とは言えない。一方で、連歌寄合から離れた性格をもつ『源氏物語』の梗概書には起筆伝承を載せていた系統の本があった可能性がある。

また、起筆伝承以外にも該資料には現行の『小鏡』には見られない本文が宇治十帖の前^{注7)}に書かれている。内容としては「源氏文しなくのこす」とはじまり桐壺巻から夢浮橋巻までの「文」を列挙したものである。この「文づくし」ともいえる本文は類似したものを未だ確認できておらず、さらなる課題の一つである。

このように、小槌氏蔵『源氏小鏡下』は「源氏小鏡下」の名を有するものの、梗概本文・引用和歌・起筆伝承・文づくし本文・連歌寄合の詞の有無等、どの点をとっても特徴的な性格である。したがって、題簽に書かれている「源氏小鏡下」とは堤康夫氏の御論^{注8)}にもある書名としての『源氏小鏡』ではなく、『源氏物語』の梗概書という、一般的な名称と考えられる。本稿では紙数の制限上、翻刻の紹介が中心になったが、今後は該資料の本文への調査を進め、梗概書としての性格を明らかにし

たい。

注

(1) 安永美保『源氏小鏡下』の紹介と翻刻①『同志社女子
大学大学院文学研究科紀要第十一号』(二〇一一年三月)
をさす。なお、本稿で紹介する小槌氏蔵『源氏小鏡下』に
関する書誌情報等については上記の拙稿に記載しており、
ここでは割愛した。

(2) 伊井春樹氏『源氏物語注釈史の研究』(桜楓社・一九八
〇年)他に、「連歌寄合の詞」を有していない『小鏡』は
和歌中心の第六系統本もある。

(3) 『源氏小鏡』の第五系統本六本のうち二本は残欠本であ
り、本稿で比較した残りの四本は築瀬一雄氏本、天理図書
館本(伝飛鳥井宋世筆)、京都大学付属図書館本、天理図
書館本(連藏筆)である。このうち、築瀬一雄氏本は『源
語研究資料集』(碧冲洞叢書第八十七輯・一九六九年二月)
に、残りの三本は岩坪健氏によって『源氏小鏡』諸本集

成』(和泉書院・二〇〇五年二月)に翻刻が公刊されてい
る。

(4) 起筆伝承の置かれている位置については、京都大学付属
図書館本は宇治十帖の前に、連藏筆天理図書館本と該資料
は巻末である。この三本の起筆伝承のうち質量ともに詳細
に書かれているのは該資料であった。該資料の記載ページ
は、翻刻の後に図版を掲載した。

(5) ここで説明した「文づくし」のページは翻刻の後ろに図
版を掲載した。

(6) 堤康夫氏『源氏物語注釈史論考』(新典社・一九九九年
五月)の中で、『玉葉集』にある「げんじのこかゞみ」と
いう記述から、当時は「小鏡」と名乗る原作とは内容的に
も隔たった梗概書が庶民層を中心として流布していた可能
性を指摘されている。

なお、前稿の公刊後、数々の貴重なご助言を下さった諸
先生方、並びに引き続き翻刻の御許可を下さった小槌義雄
氏、ご紹介下さった和田洋子氏には深く御礼申し上げます。

翻刻凡例

- ・小槌氏蔵『源氏小鏡下』を翻刻する。
- ・文字遣いは底本どおりに表示するよう心がけた。
- ・和歌の表記は底本では三字または四字下げであるが、二字下げにした。また、詠み手が明記されている場合はへゝで記載した。

・巻名の表記は底本では三字または四字下げであるが、四字下げに統一した。

・底本における改行は／で示した。ただし、和歌と巻名は右記のとおりに処した。

・底本における改頁は「で示し、そこまでの丁と表裏を（ ）で記載した

・虫損などにより、判読できない箇所は□の記号で示した。

廿一かしは木（二十八オ）

かしわ木のゑもんのかみは女三の宮にちかつきたることを／けんしのしりたまふよとおもふ心やまふとなりていとゝ／おもひ

にしつみけるにいまはの頃にも成しかきて女／三の宮へ御文をつかはして

今はとてもゑんけふりもむすほゝれ／あかぬおもひの名をやのこさむ

しそくめしてかへりみたまふに猶はかなけておかしきほとに／かきたまへり心くるしくきゝなからいかてをしはかりのこさむとあり

〈女三の宮返し〉たちそひてきえやしなましうき事の／おもひみたるゝけふりくらへを（二十八ウ）

〈かしは木よめる〉ゆくゑなき空のけふりとなりぬとも／おもふあたりをたちははなれし

たてならぬ身となりてとし月日かすつもりてわか君まふ／けたまふうふやすきて彼源氏の大臣はかしはきの子よと／おほしめせは此わかきみをいたきて

いつの世にたねをまきしと人とはゝ／るかゝ岩ねのまつはこたゑむ

かしは木恋のやまふにおかされてかくれたまひてのち二条の／女二の宮の御かたへまめ人の大将わたりたまひとふらいたまひて

ときしあれはかわらぬ色にほひけり(二十九才)かた
ゑかれにしやとの桜も

廿二よこふゑ

女三の宮まふけたまへるわかきみはゐりきたまふに山の御門
より／竹の子参りたるを若君くひかきたまへは

世にふれはうきふししけき暮竹の／子はすてかたきものに
そありける

女三の宮あまにならはやとおほしめしいとまこいしたまへとも
／源氏ゆるしたまはねは我かち、山の御門をよひ奉りいとまの
／こと申さためあまになりたまふ時

世をわかれ人なむみちはおくるとも(二十九ウ)おなし
ところをきみもたつねよ

〈女三のみや〉うき世にはあらぬ所のゆかしくて／そむく
山路におもひこそいれ

まめ人ゆふきりの大将一条のみやへおほしおち葉の宮をした／
ゐきくければみやは物をのみあはれにおほしめしつゝけて

〈おち葉のみや〉ことに出ていはぬはいふにまさるとは／
人にはちたるけしきとそみる

こかしは木のふゑのありけるをおち葉のみや大将のかたへ／い
たさせたまへはすこしねとりふきて

ふゑ竹のしらへはことにかはらぬを(三十才)むなしく
なりしねこそつきせね

此ふゑは御門よりふゑの上すとあるによりてかしは木たま／は
りけるをのちのかたみとおち葉のみやに奉りたまひける／を女
のもちて何にかせんとまめ人の大しやうたまはりけるに六／条
の院きこしめし此ふゑはすゑの世にふくへき物の／あるそとて
をかせたまひたる今夜の夢にかしは木／枕かみにたちて

ふゑ竹のふきよる風のことならば／すゑの世なかきねにも
つたへよ

ならひすゝむし(三十ウ)／
女三の宮は世をそむきたまひ寺をつくりあみた仏くやう／した
まへる時

〈けんし〉はちす葉の花のうてなとちきりおきて／露のわ
かるゝけふそかなしき

〈女三宮〉へたてなきはちすのやとをちきりにて／きみか
こゝろやすましとすらん

〈けんし〉大かたの秋をはうしとしりにしを／ふりすてか

たきすゝむしのこゑ

〈女三の宮〉こゝろもて草のやとりをいとへとも／なをすゝ
むしのねこそふりせね(三十一才)」

廿三ゆふきり

一条のかしは木のふるきすみ家にをはしけるゆふきり／の大し
やうあさゆふによひてしたひたまふおちはの宮人ふたり／みる
事のうきなとらん事心うきにおほしあさちふの／おのはわかも
ちたまふ御しやうなれは心やすくすみ侍らんとはゝ／一条の宮
と所をとにも小野ゝおくにこしはかきしつらはせず／みたまひ
けるにゆふきりの大しやうたつねおはしてしたひ／たまひけれ
とも宮たいめんもとらすすこしもなひく氣／かくもましまさね
はいたつらにかへりたまふとて

〈ゆふきり〉山里のあはれをそふるゆふきりに(三十一ウ)「
立いてん空もなきこゝちして

〈おちのはの宮〉山かつのかきをしこめてたつきりの／こゝ
ろそなる人はとゝめす

ゆふきりの大将なをこりすまに小野ゝおくゑわけ入らせ／たま
ひむまをはわかみしやうくるすの小聖に車かりたまゑとて／落

葉の宮のすみ家へたそかれにつまとをしあけて入ら／せたまひ
なためつゝかき返りたまふあした

〈ゆふきり〉萩はらや軒の露をそほちつゝ／八重たつき
りをわけてゆくへき

〈おちのはのみや〉わけゆかん草葉のつゆをかことにて(三
十二才)「なをぬれきぬをかけんとやおもふ

おち葉のみや一条のふかくさすみ家へいらせたまひぬりこめ
の中なたてこもりてゆふきりの大しやうおはしけれとも／たれ
人も入れたてすひとりふして返りたまふてのち

浦みわひむねあきかたき冬の夜に／またさしとむるあまの
いはとは

三条の北のかた雲ゐのかりはおち葉の宮を大しやう一条へむ
かへとりたるときゝたまふ事われはさまかへてのちの世ね／か
はむとおほしめし

〈雲ゐのかり〉なるゝをもうらみむよりはまつしまの(三
十二ウ)「あまのころもにたちやからまし

まつしまのあまのぬれきぬなれんとて／ぬきかゑはやとい
ふをたゝめや

かくて三条の北の方雲ゐのかりは子ともすておきて二／条のちゝ

のもとへ行たまひきたをかゑんとおもひたちたまへは／大将二
条へおはしてきたのかたをなためたまへは二条の大臣／おち
のかたへふみをつかはして

なにゆへかうきかすならぬ身ひとつを／うしともおもひか
なしとも聞

ちきりありや君を心にとゝめをきて／あはれとおもふうら
めしと聞（三十三才）

廿四御法

紫のうへはれるにおかされて今はかくとやおほしけむ此程／の
りのくやうとゝのへせさせたまひあかしのうへの中宮／の御
はらの若宮をやしない子にしたひけるを御つかる／にて明石の
うへの御かたへ

おしからぬ此身なからもかきりとて／たきゝつきなむこと
そかなしき

たきゝとるおもひはけふをはしめにて／この身にねかふの
りそはるけき

此紫のうへひとりけちかくおはしければおもかけ忘れかたくお
ほし（三十三ウ）

いにしゑの秋のゆふへの恋しさを／いまはとみえしあけく
れの夢

むらさきのうへ消けりたまへは二条の大臣御子蔵人のせう／し
やうを御つかいにて御とふらいに

いにしへのあきさへいまのこゝちして／ぬれにし袖に露そ
おきそふ

露けきはむかしいまともおほゝゑす／大かたあきの夜こそ
つらけれ

廿五まほろし

つきのとしの正月一日ほたるの兵部卿六条の院へ参り（三十四
才）したひければ大臣たいめんして

〈六条院〉わかやとの花もてはやす人もなし／何にか春の
たつねきぬらむ

〈ほたるの兵部卿〉香をとめてきつるかひなし大かたの／
花のたよるといひやなすへき

此紫のうへうゑたまひし庭の紅梅のうくひすのなくをよめる
うゑてみし花のあるしはなきやとに／しらすかほにてきぬ

るうくひす

此紫のうへのむかへの月の佛事したまひてそのくれに

人こふるわかよはすゑになりゆけと／のこりおほかる御の
りなりけり(三十四ウ)」

九月になりて九日のわたおほひたるきくをなめたまひて

もろともにおひにし菊のしら露も／ひとりたもとにかゝる
あきかな

雲のわたるかりのつはさ浦山にてまほらせたまひて

大そらをかよふまほろし夢にたに／みえこぬたまの行末た
つねよ

むらさきのうへの御ために法みやうおこなわせたまひたうしか
へり／たまふときまことや盃のつゐてにかゝる事ありし

千代の春みるへき花といのりをきて／わか身やゆきととも
にふるへき(三十五オ)」

大しんはすまあかしくたりしよりおくりたまひし文ともととり
を／きたまひたりしをゑりいたしひになしてかせきよめさせ
た／まひてあすのわかとしにゆふきりの大将をはしめ奉り／て
人々の参りたまはんする蔵のひきて物ともかれはこれはと／さ
ためおかせたまひおかしき御ありさまをこととしてよろつ／に
忍ひかたし

物おもへはすくる月日もしらぬまに／としもわか身もけふ
やつきぬる

廿六雲かくれ

廿七にほふ兵部卿又はかほる大しやう(三十五ウ)」

六条の院のうしとらのまち花ちるさとのすみ家をは／おち葉の
宮にゆつりたまふたつみのむらさきのうへの／すみ家をはあか
しの一ほんの宮すませたまふ四位侍従に／ほふ兵部卿とてふた
りつれてまとひありきたまふ／いにしへの光源氏藤中將のこと
くなり兵部卿の宮と申／はあかしの中宮の御はらの三のみやに
ていたりたまふ／をむらさきのうゑやしなひ君にして二条の院
西／のたひのたから物ともゆつりたまふ六に成たまひける／時
の事なるに此紫のうへみつからを悲しくおほしめさん時／はく
れなるの梅をみたまへはありしをうなつかせたま(三十六オ)」
ひて香るのふかけるを紅梅のもとに涙くみてひね／もす花をみ
たまへたて花のしつく御なをしにかゝり／むめのにほひふかく
しみたればけんふくしたまひて／にほふ兵部卿のみやとそ申あ
かしの中宮の御はら／のひめきみもむらさきのうへのやしなひ
君にて／六条の院の春の御かた此紫のうへのたから物ゆつりゑ

て／あかしの一ほんの宮と申てすませたまふかほる侍従／は女
三の宮かしは木に一夜のちきりこめてまふけたま／へる御子な
りかしは木のかほる此きみにのこりたれば／かほる侍従と申け
る此しゝうを六条院は御子と（三十六ウ）「もおほしめさねは
わかちゝはたれやの人にてかあるらむ／ととひたまふにもおよ
はず女三の宮にとふへきにも／あらずひとりうらみて

おほつかなたれわかとはむいかにして／はしめもはてもし
らぬわか身そ

ならひこうはる

女三の宮うみたまへるわかきみこ六条院のおほせ付られ／しこ
とくれんせいの際にてけんふくして侍従ときこへける／ちゝを
たれともきゝ侍らねはたれにもとはまほしく／てまとひありき
たまふにひやうふきやうとともなひて（三十七オ）「ありきた
まふを紅梅の大なこん殿の姫君もちたまへる／を聞うかゝひあ
りきたまふを紅梅の大納言姫／君をにほふ兵部卿にみせたてま
つるへき心／さしありて

〈紅梅の大なこん〉心ありて風のにほはすそのゝ梅を／ま
つうくひすのとはすやはある

〈にほふ兵部卿〉花の香にさそはれぬへき身なりせば／風

のたよりもすくさましやは

紅梅の大納言と申は二条の大臣の御子かしはきの／おとゝなり
紅梅をこのみておほくうへたまひしあひた（三十七ウ）「こ
うはいの大納言と申なりひめきみもちたまへるに／にほふひやう
ふきやうのみやにたてまつるけき心さしありて

〈こうはい大納言〉もとつかのにほへるきみか袖なれば／
花もゑならぬ名をやちらさむ

はなとをくにほはすやとをとめゆかは／いろにめつとや人
のとかめむ

ならひ竹かわ

ゆふきりの大臣の御子さいしやうの中将玉かつらの内侍／のか
みの御むすめに心かけてよませたまへる

おりてみはいとゝにほひのまさるやと（三十八オ）「すこ
し色めけむめのはつ花

〈玉かつら〉よそにてはわか木なりとやさたむらむ／した
にゝほへるむめのはつ花

蔵人のせうしやうもかの玉かつらの御むすめに心をかけて／た
まひけるに

人はみな花にこゝろをつくすらむ／ひとりそまよふ春の夜

のやみ

おりからやあはれもしらんむめの花／たゝ香はかりにかへりしもせし

返りて朗しみの侍従ありしの前の侍従かたへ文つかはして(三十八ウ)」

〔侍従〕竹かわのはしうちいてし一ふしに／ふかきこゝろのそこはくらきや

〔玉かつら〕たけ川によをふかさしといそきしも／いかなるふしをおもひやめけむ

ちゝひけくろの大政大臣かくれたまへはきたのかた玉かつら／内侍のかみ子ともむこくみておはしけるひめ君一人／を内侍のかみにたてゝ雲のうへにさふらはせたまふ我／もとには大君の中のみみにてふたりをかしけるに／やま桜の花をかけ物にてふたりの姫君たち碁に／かちて桜をわか物にせんと花のちるを御らんして(三十九才)」

〔まけのひめきみ〕桜ゆへに風のこゝろのさわくかな／おもふくまなきはなとみるく

〔□けの姫□きみ〕さくとみてかつはちりぬる花なれば／まくるをふかきうらみともせず

〔かちかたのひめきみ〕風にちることはよのつねゑたなから／うつろふ花をたゝにしもせし

庭の池のみきはに花のちりけるをかちかたの大夫／のみきみつらのふたに花をひろるあつめて

こゝろありていけのみきはにおつるかな／あわとなりても我かゝたによれ(三十九ウ)」

かちかたのわらはつゝらのふたをもて花のもとにありきて／散たるを花をいとおほくとりもてきたり

〔かちかたのひめ君〕大空の風にちるともさくらはな／おのか物とそかきつめてみる

〔まけかたのなれの君〕さくら花にほひあまたにちらさしと／おほうはかりの袖はやはある

源四位のせうしやうもひめきみをおもひてしうの侍従の／もとゑ文つかはして

つれなくてすくる月日をかそふれば／ものうらめしき春の暮かな(四十才)」

碁のみぞせし大夫の君

いてやなと数ならぬ身にかなはぬは／人にまけしのこゝろなりけり

夕きりの大臣の御子源中将碁のかちまけ御らんして

わりなしやたつきによらぬかちまけを／こゝろひとつにい
かゝまかせむ

れいせいの院四位侍従をめして

たけかわのその夜のことはおもはんや／しのふはかりのふ
しはなけれと

〔四位の侍従〕なかれてもたのみむなしき竹かわに〔四十
ウ〕世はうきものとおもひしりきや

源氏文しなくのこす／一きりつほの局にははゝきゝのまき侍
文おなしまきに文もちらさす／うつせみのまきたゝふかみの文
ゆふかほのまきに華につけたる文／わかむらさきのまきの中ち
いさき文これはきた山の事也／すゑつむ花のまきにみちのくか
みの文／あほひのまきにきくにつけたる文／おなしまきにまく
らのむすび文これはあいまやうの事なり／さか木のまきにゆふ
につけたる文さか木につけたる文／あさちうにつけたる文から
の香のかみにむらさきのかみのかさね文（四十一オ）ちりす
きたるもみちにつけたる文／六十かんの文これはてんたいのこ
となり四五のいわぬこれはならひめ文なり／すままきに文ゑり
て文かくことなり文あつめ／文□はこおなしまきにかくし文／

あかしのまきにもみちにうすやうかさねのふみ／こまのくるみ
文のかみの文からの香のかみの文／ゑあわせのまきにくしのは
このそへふみ／からゑにそゆる文あさかほのまきにあさかほの
枝つける文／おとめのまきに四人の文ならひの文なり／つまし
るしの文わすれしためはしりかき文（四十一ウ）

おなしまきにたて文かきかよはかし文／こすみうすくの文／た
まかつらのまきにみとりの草につけたる文／はつねのまきにね
のみの松につけたる文／ほたるのまきにあやめかさねの文／野
わきのまきにかしけたるかるかやにつけたる文／藤はかまのま
きに玉さゝにつけたる文／梅かへのまきに梅のねにつけたる文
／はこあくる文あかしの入道夢かたりの文／わかかなの下にはし
みつけたる文（四十二オ）にしきのしとねのしたの文なり／
かしわきのまきにけふりくへの文／ゆふきりのまきに人にとし
れ文／まほろしのまきにすみつきほのかなる文／文ゑりて文を
ひになして／端姫のまきにけしやう文／おなしまきにちゝをし
る文これはかほる大しやうのなり／しるかもとにさくららのえた
に付たる文／あけまきのまきにうすもみちにつけたる文／さは
らひのまきにひけこにつけたる文（注）（四十二ウ）やとりきの
まきにつたのもみちにつけたる文／あつまやのまきに萩に付た

る文／うき船のまきに山たち花のえたにつけたる文注／おな
しまきにつゝしにつけたる文／てならひのまきにおみなへしに
つけたる文／夢のうきはしに／くたりの文これは擧状なり

宇治十帖扁一橋姫又は優婆塞とてかくなり

うはそくの宮は光源氏の御おと、八の宮の御事なり源氏／すま
へなかされたまひて後れんせい院のとうくうにておほしける／
をおしおろしこうき殿の太后宮のはからひにて八の宮を（四十
三才）春宮にたゝせたまへるをけんし明石よりのほりたまひ
てれいせい／院春宮になをらせたまひて八の宮は源氏にくま
れ奉りみやこ／のかたはらに住たまへるその御すみ家やけて後
御りやうのこちの／山里にすみたまふに此きたのかたは左大臣
殿の御むすめにてわたり／ける女君二人まふけてかくれたまふ
うはそくは御むすめのひめ／君たちをそたてたまふ世をそむか
んとおほしめす所にわかき／ひめきみたちとり／ひわかきな
らしたまへはうはそく／

うちすてゝつかゑさりしに水とりの／かりのこの世にたち
おくれぬる

うちはらひてあねきみ（四十三ウ）

いかてかくすたちけるそとおもふにも／うき水とりのちき
りをそしる

いますこしをそなけにすゝりひきよせたまへり

なく／もはねうちかはすきみなくは／我そすもりになる

へかりける

うはそくのみやきたのかたにおくれてのち世をいとひ彼人をと
／ふらはゝやとおほしめし

みし人もうやともけふりとなりにけり／何とてわか身きえ
のこるらむ

宇治の宮世をいとひ山こもりさせたまふれんせい院きこしめし
（四十四オ）／やかて御つかいあり

〈れんせい院〉世をいとふこゝろは山にかよへとも／八重
たつ雲をきみやへたつる

〈うはそく〉跡たえてこゝろすみぬとなけれとも／よを宇
治山にやとをこそかれ

かほる中将うはそくの世をいとふかせたまふにもうらやましく
／おもひ彼山さとへ御とふらいにわけ入たまふ木の葉散ぬる夕
たへに

山おろしたへぬこの世の霞よりも／あやなくもろきわか涙

かな

うはそくのみやは山こもりしていたりければ其夜のとのゐし
〔四十四ウ〕ひとりこゝろをすまし夜もすからひめたちのひわ
こととりく／＼に／＼ならしたまふをきゝあり明の月さし出けれい
つものすかきの／＼ひまよりのそき見したてまつりあしたかへり
たまはんとてひめ君／＼の御かたへ文つかはし

〈かほる〉あさほらけ家ちも見えすたつねこし／＼まきのお
山はきりこめてけり

なをかへりかねてかほる

はしひめの心をくみてたかせさす／＼さをのしづくに袖そぬ
れとる

〈あね君〉たかせさす宇治の川をさあさゆふに〔四十五オ〕
しづくや袖をくたしはつへき

かほる中將はうちへ参りつゝかしは木のめのと弁のおもとに／
あひかしは木のむかしの事ともかたり女三の宮の御返事の／文
ともかほる中將に弁のおもとまいらせければ

〈かほる〉めのまへに此世をそむくきみよりも／＼よそにわ
かるゝたまそかなしき

いのちあらは其ともみまし人しれす／岩ねにとめしまつ

おひさき

二椎かもと

二月廿日のほとにほふ兵部卿の宮はつせまふての〔四十五ウ〕
もとりに宇治のむかひのさとはゆふきりの大臣の御莊なれ／な
れは御きみたちをつかはし酒迎させたまふ水のうへに／らうつ
くりかけ夜もすから琵琶琴ふき物ともひゝき／＼きこへければつ
きのあしたうはそくの宮文あり

山風のかすみふきとくをとほあれと／＼へたてゝ見ゆるをち
のしら波

にほふ兵部卿の宮うはそくのすみ家にたちよらせたまへはあ／
しろひやうふひきなをし入奉りて返りたまふに姫君たち／あま
たおはするをきゝわらはして文奉りたまひける

山さくらにほふあたりなたつねきて〔四十六オ〕おなし
かさしをおりてけるかな

かほる中將宇治のすみ家にわたりてうはそくのみやに／さま
／＼のさためとも忘したひて

〈かほる〉いかならむ世にかたへせむなかきよの／＼ちきり
むすへる草のいほりに

われなくて草のいほりはあれぬとも／この一ことはたへし
とそおもふ

うはそくの宮かくれたまふ御とふらいの文に

〈にほふ宮〉小鹿なく秋の山里いかならむ／こはきか露の
かゝる夕くれ（四十六ウ）

〈中宮返し〉なみたのみきりふたかれるやまさとの／まか
きに鹿そもろこゑになく

あらたまのとしたちかへれともたゝふた所はかり春の／雪のふ
るを見て

〈あね君〉君なくて岩のかけみちたへしより／まつのを雪を
も何とかは見る

〈中宮〉おく山の松葉にたまるゆきとたに／きへにし人を
おもふましかは

〈かほる〉たちよらんかけとたのみししるかもと／むなし
きとことなりにけるかな（四十七才）

三 あけまき

かほる中納言はひめきみたちの藤衣かせ奉りむかへの月の／佛
事いとなみたまひいまはふる宮のさためたまひし姫君／のちき

りのこといまかとおほしめしけるにきちやうのほころひ／より
見入たまへは姫君たちあけまきむすはせたまふをかほる中納言
すゝりめしよせて

〈かほる〉あけまきになかきちきりをむすひつゝ／をなし
こゝろによりもあはなむ

〈あね返し〉ぬきもあへすもろきなみたの玉のをに／たへ
ぬちきりをいかゝむすはむ（四十七ウ）

かほる中納言のもとへ兵部卿おはして宇治の山里の／ひめきみ
たちのことをとひたまへはかほる中納言こゝろとけても／かた
りたまはねは

おみなへしさけるおうのをふせきつゝ／こゝろせはくもし
めをゆふらむ

きりふかきあしたのはしのをみなへし／こゝろによせて見
る人そ見る

かほるは兵部卿の宮のうらみことはりとおほしめし／夕暮に兵
部卿をわか御車にのせ奉りて内の山里へ／わたらせたまひへん

のもとをたのみ中宮の申文^{（注3）}せよと（四十八才）たのみた
まへはみち引たまひて返りたまふあした

〈にほふ〉しるへせしわれや返りてまよふへき／こゝろも

ゆかぬあけ暮のみち

〈中宮返し〉かた／＼にくらす心をおもひやれ／人やりな
らぬみちにまよは、

かほる中納言はよかれなくかよは、やと思へ共つゝましければ
文して

へたてなきこゝろはかりはかよへとも／なきし袖をはかけ
しとそおもふ

〈あね君〉中たゑん物ならなくにはしひめの／かたしく袖
や夜半にぬらさむ（四十八ウ）

にほふ兵部卿かほる中納言ゆふきりの大臣御子引つれて／宇治
山のもみち見にわたり夕きりの君たち

〈さいしやう中將〉いつそやも花のさかりに一めみし／木
のもとさらや秋はさひしき

あかしのかたとおほし人みて

〈かほる〉桜しにおもひしるなれさきにほふ／花も紅葉も
つねならぬ世に

〈ゑもんのかみ〉いつくにか秋はゆきけむ山里の／もみち
のかけはすきうき物を

〈みやのたい〉みし人もなき山里の岩かきに（四十九才）

こゝろなかくもはゑるつたかな

あきはてゝさひしきまさる木のもとを／ふきなすくしそみ
ねのまつ風

にほふ兵部卿うちの人恋しくおほしめしわつらうに御いもふと
／女一の宮におんな絵をしへてをゆるしたまふになりひらかい

もう／とわか草に琴をおしへけるをおほしめし出て
わか草のねも見ぬ物とおもはねと／むすほゝれたるこゝち

こそすれ
かほる中納言はとよのあかりの御ひまことにはるかにとひたま

／ひて宇治の山里へわたりたまへはあね君のやまふのかきりと
（四十九ウ）見へければなこりふかくおほえて

霜さゆるみきわの千鳥うちわひて／なく音かなしきあさほ
らげかな

大ひめきみはかきりにて物もいゝたまはねは中の君弁のおもと
／をたよりにて

あか月の霜うちはらひなく千とり／物おもふ人の心をやし
る

にほう兵部卿はうへのおほせ事おそれたまひて雪のふる／暮に
御ふみつかはして

かきくもり日かけもみえぬをく山の（五十オ）心をくらすこゝろもあるかな

宇治のあねきみかくれたまひて彼つかへる人々藤衣きたるを御らんして

くれなるにをつるなみたのかひなきは／かたみのいろをそめぬ成けり

四さはらひ

あね君うせたまひてのちあらたまの年たちかへれとも／祝言（注）をしたまはずなかめあかしくらさせたまふにむかるのあ／さりよりひけこにはつわらひ入て奉るとて

君にとてあまたのとしをつみしかは（五十ウ）つねをわすれぬはつわらひかな

此春はたれにか見せんなき人の／かたみにつめるみねのさわらひ

中の君はあね宮のふくぬかせたまひて二条の院へむかゑん／ときこへけり御門中宮御ゆるされあかてうちの中／の君を二条の院へ奉れとおほせたれは

はかなしやかすみ衣返しに／花のひほとくおりそきにけ

り

ひやうふきやう山里にむかへのためにわたりけるに庭の／こう梅にうくひすのかよひければ（五十一オ）

みる人の嵐にまかふやまさとに／むかしおほゆる花の香そする

袖ふれし梅はかわらぬにほひにて／ねこめうつろふやとやことなる

中宮の御むかる車参りければ宇治の里を出たまふ／に山こへに二月七日のゆふ月夜を御らんして

なかむれは山よりいて、ゆく月も／世にすみわひて山にこそいれ

五やとり木又はかほるとも

ゆふきりの大臣の内侍のすけの六のきみをおち葉（五十一ウ）の宮やうしにしたまひにほふ兵部卿をむこにとりたてまつらんとてつかい奉りければおそくおはするとて大しん

大そらの月たにやとるわかやとに／まつよるすきてみえぬ君かな

にほふ兵部卿は六てう院にむこ入りして宇治の中の君は／二条

の院にすてられてなかめをかしける

山里の松のかけにもかくはかり／身にしむ秋の風はなかり

き

二条ゑんのにしのたひの中宮かく兵部卿たのもし／けなくおほしめすころ日暮らしのなくを聞て（五十二才）

大かたにきかまし物を日くらしの／こゑうらめしき秋のく
れかな

中の君は宇治へわたり給ひてうはそくの宮のふるきてん／ともこほし寺つくりたまふとてかほる大しやううちの川むかい／のてらつくらせたまふをみ奉りにわたらせたまふつゐてに／彼山さとへたちよりたまふにめつらしきかさり車一りやう彼所／に出来りたまふかほる大将すいかきの隙よりみたまへはきよらかなる姫君おはす弁のあまをめしてとはせたまへはあまの／君と申侍にし人のうはそくの宮のおとひめ君御むかへ参りし／つゐてにあね君にたいめんとりたまはんとかたれはみまほしく（五十二才）おほしいふしてかとのたまへは文たまへ此君のはらひたちの／かみのきたのかたにしかとつたへ奉らんと申せば文あそはして

かをとりの声もきこへぬにかよふやと／しけみをわけてけ

ふそたつぬる

六あつまや

あつまやの君はうはそくの宮のおとひめなりうはそくの／きたのかたかくれたまひてのち中将の君といふ人をみつめた／まひてまふけたまひ姫君は、はいまのひたちのかみ成て／くたりたりしひたちの国にてむまれたまひしあいたあつまの／君と申は、もともにみやこへ上りてあね宇治の中の（五十三才）君兵部卿のにのかたになりて二条院のにしのたるに／おはしける所へたいめむのためにわたりけるをかほる大しやう／一目みたまひしより御心にしみければ中の君にあひたて／まつりてこ大ひめ君のかたしろにみ奉らはやとあつまの／君に御心をかけて

〈かほる〉みし人のかたしろならば身にそへて／恋しきよ、
のなてものにせむ

みそき川せゝにいてなむなてものを／身にそふかけとたれ
かたのまむ

あねの中のきみあつまのきみをかほるのにかたとさ（五十三才）ためたまへはかほる大将やとをとりかへにしおき奉をひたちの／かみのきたのかたこゝろうきことにおほしめしひさふ

るに／大しやうみたまふへきはよろこひの中のなけきにてあつ
ま／の君急文つかはし

ひたふるにうれしかるへき世の中／あらぬところとおも
ふましかは

〈あつまの君〉うき世にはあらぬ所をもとめても／君かす
み家を見るよしもかな

かほる大将あつまの君のかたろひおはしけるを宇治の／かたに
うつし奉らんと車いかせわたりたまふに雨そゝきふりければ
(五十四才)

さしとむるむくらやしけきあつまの／あまりほとふるあ
まそゝきかな

あつまの君宇治の山里へわたりたまひて彼弁のあまつた／のも
みちをちらしたくた物まいらすとて

やとり木は色かわりぬる秋なれと／むかしおほえてすめる
月かな

〈あつまの君〉さとの名もむかしかたりにみし人の／おも
かわりせるねやの月かな

七うき船

かほる大しやうはあつまの君を宇治の山里にふかくかく(五十
四ウ)しおきこゝろやすくおほしめしけるに正月一日あつま
の／君のひけこにゆわひのくた物入たち花をつらぬき／山たち
花の枝をつくりこてうの中の君のわかきみの／かたへこゝろさ
し文にて

〈あつまの君〉またふりぬものにはあれときみかため／ふ
かきこゝろにつまをしらなむ

にほう兵部卿はかほる大将あつまの君をうちの山里にお／きた
るこそゆかしけれかほる大将院ふたきのことも／ひまなければ
宇治へしははわたらさりける頃しも／すけの大ふといふ物を
めしてあつまの君のおはする(五十五才)所へしるへせよと
のたまへはしらぬよし申けれどもふかく／たのみ宮このうちを
は車にて出たまひ東山よりは馬／にて山こへにあつまの君の住
家へわたりたまひ面の門／にはとのるあまたあれは西むきのあ
しろきをこへ御供／の人をは葦原にをき夜ふけて忍び入たまふ
東空の君／は夜ふくるまで女房たちと物語して御ましのへさせ
てん／のあふらかきたてふしたまふ女房たちもうつつみひして／
ふしけるに兵部卿は大しやうのまねをしてこゑを作り／妻戸あ

けさせあつまの君のふしたまふ所へをはすればか／ほる大将なりとあつまのきみはしたかわしとからかひたまへとも（五十五ウ）おんなのならひちからおよはず明方にひやうふきやうの供の者／いそき出させたまへと申せともしぬるこゝちすればけふはかへら／しとのたまふあひたちて出たまはずあつまの君を石山まふて／させたて奉らんとては、君のかたよりむかへの車参り／ければ物いみとてすたれにふたつけてかへり給はず次朝／兵部卿帰りたまはんとなこりをしひみめ君をひさしへ／いたし奉りてもろともになかめいたしなを出もやりたまはて

世にしらすまとふへきかなさきにたつ／なみたまみちもかきくらしつゝ、（五十六才）

〈あつまの君〉涙をもほとなき袖にせきかねて／いかゝわかれをとゝむへき身そ

なをも名残をしみいてたまはずなくさめかねて

〈兵部卿〉宇治橋のなかきちきりはたへせしを／あやふむかたにこゝろさはくな

〈浮船〉たへまのみ世にはあやうきうち橋を／くちせぬ物となをたのまとや

暮後又兵部卿宇治へわたりたまひ山里はよそめつゝましけれ／

はをちのきとのほかせのもとにやとをとりちいさき船に姫／君いたきのせて侍従はかり御ともありたち花のこしまかさき（五十六ウ）をふねさしわたすとて

としふともかはらん物かたち花の／こしまかさきにちきるこゝろは

橘のこしまの色はかわらしを／此うき船そゆくゑしられぬはかせのもとへいき奉り中一日とめ奉りなくさめたまふに／春の霞かきくらしふりけるに

みねの雪みきわのこほりふみわけて／君にそまよふみちはまよはず

ふりみたるみきはにこほる雪よりも（五十七才）中空にてそ我はけぬへき

かほる大将は大うちの春のまつり事しけ、れば隙も／なくてあつまの君のつれくゝのみおもひいたして文つかはし

おもひやるそなたの雲のみえぬまで／そらさえくるゝころのさひしさ

〈あまの君〉水まさるをちの里人いかならむ／はれぬるためにかきくらすかな

かほる大しやうたへすおとろきたまふこゝろさしのおもひ／わ

つらいててならいに

里の名もわか身にしれは山しろの（五十七ウ）宇治のあ
たりはいとゝすみうき

大しやううちの山さとへわたりたまふ雲のうへのまつりことに
／日まをゑす三てうのてんをつくりてやよひの廿日のほとに
むかへ奉らんとなくさめたまひ春雨のふりに

かきくらしはれせぬみねのあま雲に／ゆきてもそゆる身と
もならばや

つれゝに身をしる雨のをやまねは／袖さえいとゝみかさ
まさりて

又にはふ兵部卿も蔵人の大夫といふ物の女房子うみた／りける
後うふやあかはかの所をしつらひて後東空の君（五十八オ）
をやよひつこもこりの頃ぬすみとらはやとおほしめしけるかゝ
／るころおひ大后宮なやみたまふことありて六条院のしん／て
んにわたりければ天下のさわきとおもてひへの山のよ／川の僧
都よひて様々の御いのりともさせたまふ／かほる大しやう蔵人
のすけの大ふといふ物を宇治の山里へ／御つかいにやりたりけ
る時もあるわらは藤のゑたにたて／文つけて彼山里へもてま
いるあやしく思ひ心をつけて／みるまゝに妻戸のまより女房た

ちとり入てすくに御返ことありとりて返るをみれはにほふ兵部
卿のはらはと見／さためて蔵人すけの大夫かへり参りて大将に
申せはあやしく（五十八ウ）おほしなから六条院へ参りたま
ひけるに宮の大夫つゝしの枝に／つけたる文をもてまいるにほ
ふ兵部卿に奉れはかたはらに／うちむきてよみたまふをそはめ
にみたまへは彼山里の人の返／事なり大将三条へかへり御庄の
物ともにおほせ付られて／あらし武者十一二三百人かの山里に
きひしくとのいさせたまひ／御ふみ奉り

なみこゆるころともしらすゑの松／まつらんとのみおも
ひとるかな

いつくにか身をはすてんとしらす雲の／かゝらぬ山もなく
くそゆく（五十九オ）
にほふ兵部卿もかほる大しやう彼山里にとのゐをおほくお／き
たりと聞たまひてよりきもつふれ我かよひ給を大将は／しりけ
るにこそとやすき心もせず今一度彼人を見奉ら／はやとむまに
て御ともの人四五人くせかの山里へわたりたまへはとの／ゐ人
おほくよははりのゝしりければかたはらにてむまよりおり／忍
て人をつかはす今一とさありさまを見奉らんとてきたり／侍と
のたまへはひめ君もいまにいたりては一めみし奉らんとて西／

むきのあしかきをこされ姫君にはあをりをしかせ奉り／我か身
はむかはきをきてたいめんし給ふ時とかむる里のいぬ／ほえ
さわきければ御ともの人おそれてふるひわなゝきけ（五十九ウ）
れはたいめんして返りたまふとて

〈うき船〉なけきわひ身をはすつともなき影に／うきなな
かさむことをこそおもへ

みやこへ返りてなく／文つかはす

〈兵部卿〉からをたにうき世の中にとゝめすは／いつくい

かにと君をうらみむ

〈うき船〉のちにまたあひみんことをおもひなは／この世
のゆめにこゝろまとはし

ふけ行までおもふことさま／かきとゝめきたのかたゑも文／
かきをきてひとへに宇治川に身をすてはやとおほしめし（六十
オ）女房たちをなためふせかきつけやうにうせたまふ硯の下
／なる文にはかねのねをつく／と聞きためたる事／をかきて
かねの音のたゆるひゝきにねをそへて／わか世つきぬと君
につたへよ

八影ろふ

かほる大将はうき船の君なくならせたまへるをきたの二条の
院へおはしたち花の木もとにたちよりてうちのやとへ／わたり
たまはんとのたまふ所に郭公一声二声なくを聞たまひて

忍ねは君もなくらんほとゝきす／してのたをさにこゝろか
よはし（六十ウ）

たち花のかほるあたりはほとゝきす／こゝろしてこそなく
へかりけれ

かほる大将宇治の山さとへをはして

我もまたうきふる里のあれはては／たゝやとり木とかけを
しのはむ

かほる大将あつまの君のことをおほしめし出てなかめたまふ
夕暮にかけろふといふむしのとひかふを見て

ありとみて手にはとられす見れば又／ゆくゑもしらすきゆ
るかけろふ

九手ならひ（六十一オ）

おのゝあまのはゝの太后の御供してはつせまふてくたりし時
ならさかよりあんしこゝろいてきたれば宇治の里に中やとり

しける夜は、のはらの大あまきみいたくなやまたまふにをの、
 ／あまのあにのよ川の僧都をよひくたし日とふりうしいのり
 しけるあさほらけにもりの木かけによき、ぬきたる人のい／き
 はかりかよひてふしたるをもともみつけてはけ物／そとさわ
 けはをの、あまそうつともみつけてとるに／はけ物にては
 なしてんくうにおかされたる人なりとてうち／ゑかき入てかち
 しければ人こゝろ出きて我をは川へ入たまへと／いきのしたに
 いひたまふをおの、あまはつせこもりのときさ（六十一ウ）」
 る夢のつけありつれば観音のおはせたまふにこそとよる／こひ
 車にいたきのせ小野、おくかけろふといふ所にきた／てまつ
 れは四月五月はさらにしやうねもなくなやみふしたま／ひしを
 よ川のそうつかちしければ物のけのきてこゝちとり／なをし人
 になりてありしうき名なかせしことにうち川に／身をなけん
 と橋のすのこにこしをかけてあしをさしおろし／たまふをこ玉と
 いふ物とりてける我なからくちをしければてならひに

身をなけるなみたの川のはやきせに／しからみかけてたれ
 はとゝめし（六十二オ）

我かくてうき世の中にめくるとも／たれかしらまし月のみ
 やこに

をの、あまのむこの中将よ川へ参りけるつるてにかの山里へ／
 たちよりてあま君に対面し時風あらく吹みたるす／たれのひま
 よりてならひの君をみておみなへしのゑたに文を／かきむすひ
 つけてつかはしとる

〔中しやう〕あたしの、風になひくなをみなへし／われし
 めゆはんみちとをくとも

〔てならひ〕うつしへておもひみたれぬをみなへし／うき
 世をそむく草のいほりに（六十二ウ）

むこの中将てならひのきみをなを心にかけて鷹かりに名付／て
 小野、おくゑおはし文こまやかにかきつかはし

まつむしのごゑをたつねてきつれとも／また萩はらのみち
 にまよへは

小野、あま君なか月に成てはつせへまいる観音の夢の／つけあ
 りてかゝるひめ君をまふけたるよろこひにいさなるしたまへは
 はかなくて世にふる川のうきせゝに／たつねもゆかし二も
 とのすき

とよみたまへは小野、のあま君も

ふる川の杉のもとたちしらねとも（六十三オ）過にし人
 によそへてそみる

てならひの君世をそむかむとねかひたまふをかさりをろさん／
事を小野ゝあまをしみたまへははつせのたひによ川の僧／都の
六条院へ参りたまふとてをのへよらせたまへりつゐてにかさり
をろして五かゝるをうけたまふ

なき物と身をも人をもおもひつゝ／すてさし世をそさらに
すてぬる

てならひの君つまかへひとのちに極楽をねかひたまふと／きゝ
ておのゝあまのふるむこの中将御ふみつかはして

岸とをくこきはなるらんあま船に〔六十三ウ〕のりおく
れしといそかるゝかな

へてならひこゝろこそうき世の中をはなるれと／ゆくゑ
もしらぬあまの浮船

わか菜を籠に入れて人もてきり（雑）をあま君みたまひて
山里のゆきまのわかかなつみはやし／なをおいさきのたのま
るゝかな

雪ふかき小野ゝわかかなもけふよりは／君かたためにそとしも
つむへき

袖ふれし人こそしらはなのかの／それかとにほふ春のあ
け暮〔六十四オ〕

かほる大將宇治の御寺にわたりてうき船の君のむかへの／月の
はてことよませたまひて

みし人は影もとまらぬ水のうへに／おちそふなみたいとゝ
せきあへす

手ならひのあま君すみ衣に身をやつしたまへはくれなゐ／にさ
くらのこうちきそへて奉れば

あま衣かはれる身にやありしよの／こゝろに袖をかけてし
のはむ

十夢のうき橋

てならひの君うき船のまきに橋のすのこより身をなけ〔六十四
ウ〕しまをこたまにとられてもりのしたにありけるを小野ゝ

あ／ま君たすけによりてかけるふのおのといふ村にすみ侍りけ
／るかわれなからくちをしければてならひしてあまに成ける／

をかほる大將夢つけよ川の僧都の御ふみをとりにて我か／文をそ
へて手ならひの君のおとゝわらはにもたせておのへつかはす

法のしとたつぬるみちをしるへにて／おもはぬみちにふみ
まよふかな

夢のうき橋といふは生い死のはしめよろこひはうれへのはし／

め救事地獄のはしめたのしみはまとしきはしめしん／しんなく
 のはしめ善根佛神のはしめ花は紅葉の（六十五才）はしめか
 くのことくめのまへにうつりかわるむくひあることとん／よく
 にまとほてやゝもすれは佛心をうしなはんとす互／のみちをも
 んでみちひかんために諸の仏神ひかる源／氏とあらはれたまふ
 これはむらかみの皇帝上東門院の／御かみ文つかはしてめつら
 しからむさふしをたまはれつれ／なくさむへしとおほせけ
 れは上東門院の御内に越前／のためときかむすめしてうつほの
 物かたり岩屋の／さふしこそあれともめつらしからすあたらし
 きさうしかる／て西山の御門へまいらせよとおほせければおん
 なの身にて／いかゝさやうのめつらしきさうしをはかき侍るへ
 きと申せとも（六十五才）門院きこしめしもいれねは紫式部
 観音のけしんにて／もやありけんいし山に七月七夜こもりの
 りけれ共しるし／なくて下向しけるにあふみの水うみに源氏の
 まきならひ／のつき／のこゝろこと葉のうきたるを文字をみ
 およひて／宮こへのほりてかきつゝけたりそも／源氏の物か
 たりある事／とも申又はなき事とも申なりしかるにいまも一天
 下のおう／そく男女歌道をしる人は源氏にのそみをかくること
 は石／山の観音伊勢住吉衆生さいとの御方便ゆふにあふひ／の

まきにては賀茂の事榊のまきにては伊勢の事み／をつくしのま
 きにては住吉まふて玉かつらのまきにては初（六十六才）瀬
 まふて八幡まふてたさいふの観音寺松浦の神／の宮の御ことを
 かき侍る也又明石の入道はかゝりし時住吉／をしんかうし年ま
 ふてしこもりたる夢にしゆみせんを／いたゝき月日をいたゝき
 小船にのり西へ行といふ夢をみ／て下向して後ひめを一人まふ
 けをきたうしんおこしきやう／にんとなり明石の岩やに住たる
 なり彼住吉の夢をあは／するにまこのひめ君さききにたち王子
 たんしやうなり／て春宮にたゝせたまふへきいはれとあわする
 其夢の／いのりのために行人とはなりたるなりわかなのまきに
 て／八十ねんへて彼ひまこに春宮をまふけ住吉の物語を（六十
 六才）かきたるなり是は住吉人凡明石の入道ふたつなきゆえ
 也／八十にあまりてのちみやまにたつね入老死ところを／しら
 せずしゆみせんをもほて山のうへとす人の申にはわう／をもほ
 て上とすこれによりて一きりつほとかきたる也／大裏のことを
 しらんためにさてまきのはしめに光／源氏のはゝ君きりつほの
 かういの事を書たる也／かうゐのために御門御心つくさせたま
 ひ光源氏をまふけ／たまふこのことは石山観音の御方便にて紫
 式部／にかくのことくの事をつけしらしめたまふ源氏のまとて

石山寺にいまにありよろつうたかふへからす (六十七オ)「何事も夢まほろしといふ心にすへのまきを夢のうき橋といふ也 (六十七ウ)」

注

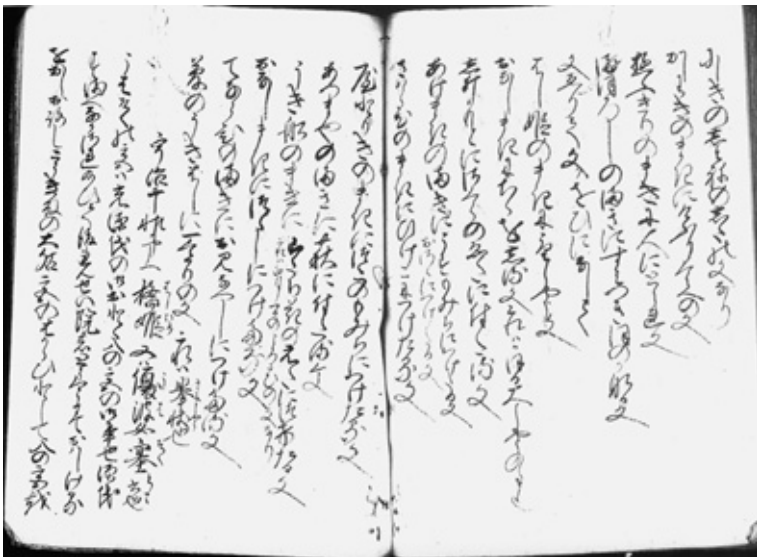
- (1) 九行と十行行間に本文同筆で「おさらにつけたる文」の書き込み。
- (2) 三行と四行行間に本文同筆で「これは正月一日のよろこひの文なり」の書き込み。
- (3) 「申文」右横に「しるべ」の書き込み。
- (4) 「祝言」右横に「しうけん」左横に「ことふき」の書き込み。
- (5) 「…きり」右横に小字で「たる」の書き込み。



図版①「文づくし」(41オ)



図版②「文づくし」(41ウ・42オ)



図版③「文づくし」(42ウ・43オ)



図版④「起筆伝承」(65才)



図版⑤「起筆伝承」(65ウ・66才)

